

# 「伝統工芸士」に認定

能代市の職人の福島輝久さん(44) 樽富かまた

能代市末広町の桶樽製造業「樽富かまた」(柳谷誠子社長)の職人福島輝久さん

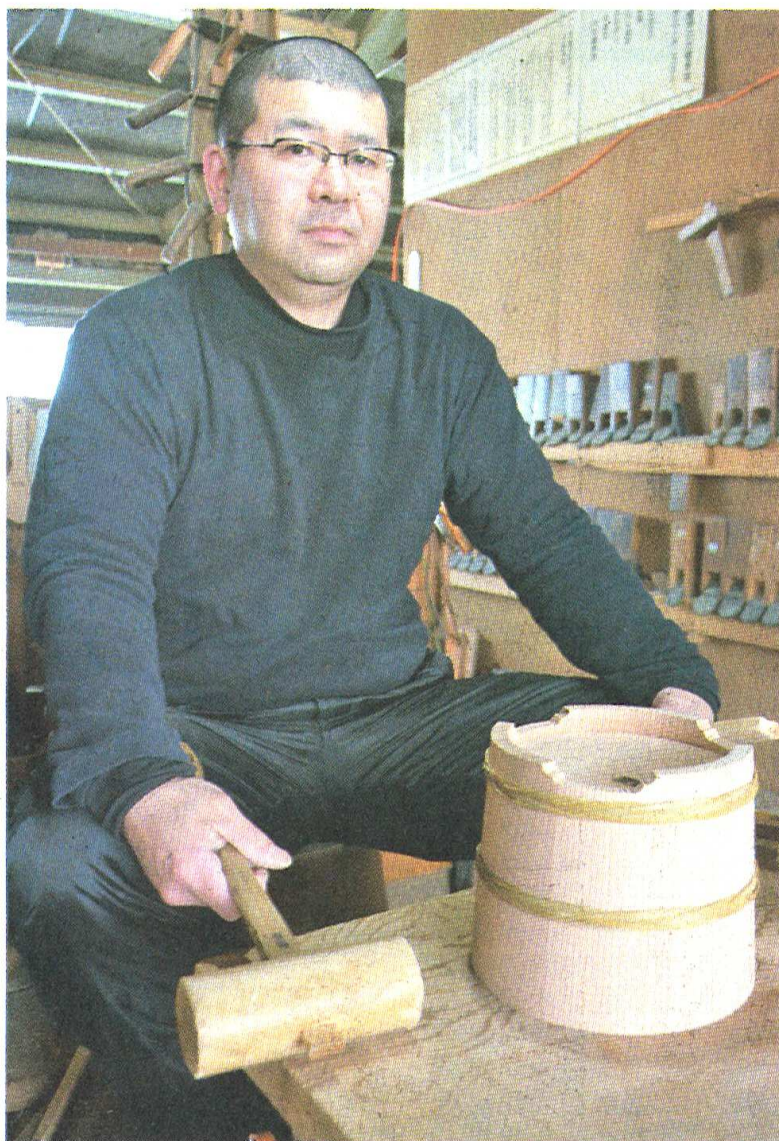
振興協会によると、秋田杉桶樽の伝統工芸士は現役が県内で4人、累計16人。

2月時点で累計7683人、現役4102人が登録されている。

(44)が、経済産業大臣指定伝統的工芸品である秋田杉桶樽の「伝統工芸士」に認定された。伝統的工芸品産業

同協会は指定伝統工芸品の製造に12年以上携わり、高度な技術を持つ職人を「伝統工芸士」と認定。昨年

秋田杉桶樽の伝統工芸士は、「現代の名工」に選ばれた樽富かまた11代目の故鎌田勇平氏の長男で12代目を



秋田杉桶樽の伝統工芸士に認定された福島さん(樽富かまたの工房で)

継いだ故康平氏が平成16年に認定を受けて以来。福島さんは昨年9、10月の実技・知識試験に合格し、伝統工芸士に認定された。

福島さんは奈良県生駒市出身。地元の高校を卒業後、母が八峰町八森出身という縁もあり、樽富かまたに就職。「木の容器は身の回りになかったので珍しく、自分でも作りたいと思った」と遠く離れた木都能代で桶樽職人になる決意をした。

同社で製造する秋田杉工芸品は、ビールジョッキ、冷酒杯といった酒器や重箱、おひつ、花器、祝い樽など20種類以上。天然秋田杉が平成24年度に供給停止されてからは樹齢約80年の高齢

杉で組み立てている。

東大寺二月堂(奈良市)の伝統法会「お水取り」で使用する桶も製作。昨年11月には秋田杉の白太と赤身で紅

## 奈良県から移住し23年

# 「木のぬくもり」が魅力

持つてもらえればと試験を受けた。スタート地点に立った心構えで、これからも消費者の意見を聞き自分の目線だけでなくいろんな角度から見て商品開発につなげたい」と言う。

自身もほれ込む秋田杉桶樽の魅力について「陶器にはない木のぬくもりがある。香りもいい。断熱性があり、機能性も見直されている。おひつは水分を吸収するので、ご飯がおいしくなる。曲げわっぱと違って木を組み上げるので、複雑な模様も作ることができ」とアピールする。

現在後輩職人と2人で工芸品を手掛けている。桶樽職人は市内でも数人を残すだけとなったが、福島さんは「伝統歴史は大切だが今こうして工芸品を作れていることに感謝の気持ちがある。1口1口を大切に、できることをやっていくことが未来につながる」と話した。9日に市役所で認定証の伝達式がある。